

久保田村新井家に縁のある俳人たち―その一―

―孤柳園山童と鏡裏坊野松―

針谷浩一

はじめに

吉見町久保田の新井康夫氏から約三万点の文書が埼玉県立文書館に寄託されているが、その中に多量の俳諧資料が含まれていることは、従来から埼玉俳諧史研究会を主宰されている小林甲子男氏による研究で知られていた。現在、平成二十三年度末の目録刊行を期して整理作業を進めているが、孤柳園山童あるいは保積太郎兵衛正謙という名前の筆者による写本がまとまって残されていた。俳諧関係の書籍の写本ならば、存在している理由もある程度推定できるが、全く俳諧とは無関係の本の写本なので、理由を図りかねていた。保積家に残されている分には何も問題がないが、いくら娘が嫁いだとはいえ、新井家の蔵書中に他人の写した本が大量にあるのかと不思議に思っていたところ、一冊の写本の存在に気がついた。『孤柳園追悼』（新井侑家文書七八一二）というタイトルが付いており、句集発行の最要因である故人の追善・追悼の範疇に属していることが分かる。筆者は、明記されてはいないものの、独特な筆遣いから新井家七代目の当主であった宇左衛門堯知と推定される。一般的に、句集は故人の業績を顕彰する

ために、一定部数を出版することになっていった場合が多かったので、写本の追悼句集の存在は珍しいものである。山童は東武獅子門に属していた俳人ではなかったが、東武獅子門とくに玄武坊白山老人の系統では、他の流派とは異なり、追悼句集や追善句集を刊本の形では出さなかつたようで、代表をつとめていた玄武老人が亡くなった時にも門弟達が追悼句集を編纂した様子は見られない。この流派では、各務支考以来の伝統である「墨直し」という行事に関連した「墨直集」を毎年刊行することに力が入られ、俳人の死という事実が句集の刊行動機にならなかつたことが推測される。玄武老人の死を看取った鏡裏坊野松が文化十一年に亡くなったときや尚友坊桃宜が天保五年に死亡した時も刊本ではなく、写本の追悼句集しか作られなかつたようである。俳諧書や句集の収集については、俳諧資料のコレクションでも三本指に入る天理図書館綿屋文庫、東大図書館酒竹・竹令文庫、伊丹市の財団法人柿衛文庫の蔵書目録を見ても、孤柳園山童の刊行された追悼句集らしきものは収録されていない。埼玉県域の俳諧資料を発掘され、丹念に紹介されている小林甲子男氏の著作に『さいたま俳諧史の人び

と」(さきたま出版会、一九九一年)があり、その中に「奇妙な二人連れの俳人 山蛭・山童」という節があるが、山蛭・山童とも追悼句集の話には言及されていない。

本稿で取り上げるのは、そのなかの一人である山童こと保積太郎兵衛正誼(俳号 孤柳園山童)と彼の娘の長男すなわち孫になる新井宇左衛門(俳号 鏡裏坊野松)である。山童については、母親の弟である山蛭こと岡本佐七郎吉品との関係ばかりが今までは注目されてきたが、東武獅子門白山派の代表的な俳人でもあった野松こと新井宇左衛門との祖父・孫の関係も注目に値するものである。

江戸時代に、保積家は比企郡竹本村(現鳩山町)でまる久という酒屋を営んでおり、新井家は代々横見郡久保田村(現吉見町)で名主をつとめていた。保積家から新井家へは二代にわたって嫁入りがなされておおり(新井家五代義忠の妻りつと六代興勝の妻てうの二人)、両家はかなり近い縁戚関係にあったが、現在では両家のあいだのゆききはなと新井康夫氏は言っている。

一 孤柳園山童について

孤柳園山童こと保積太郎兵衛正誼は、寛政七年(一七九五)臘月(陰曆十二月)八日に七十五才で亡くなり、保積家の歴代が葬られている墓地に墓があり、円形の墓碑が建てられている。法名は「光聚院明言祖真居士」といい、字は素心、号を虎洞と付けたことが知られている。没年から逆算すると、山童は享保五年(一七二〇)に父保積太

郎兵衛正喜、母よしの子どもとして生まれたことが推定できる。よしは下古寺村で名主を勤めていた岡本平兵衛吉房の娘で、弟に山蛭という俳号を持つ佐七郎吉品がいた。後に、叔父・甥コンビで常に二人で行動することで知られた人たちである。父親である正喜も太郎兵衛を名乗っており、二代にわたって保積家には太郎兵衛がいたことになる。生家は酒屋を営んでいたので、山童は「酒屋の素心様」という愛称で親しまれていた。ただし、保積家は二回火災に遭っているため、古文書の類は全く残っておらず、山童が得意にしていた書の内容や俳句の草稿・短冊等は皆無なので、事績についてはほとんど知られていないのが実情である。

入門した時期についてはわからないものの、山童は、叔父の山蛭とともに、伊勢派の俳人である守墨庵佐久間柳居の門弟となった。柳居は本名を佐久間三郎左衛門長利といい、本所石原に住んでいた旗本で、椿子・長水・麦阿・眠柳・落霞窓・松籟庵・鷗心亭・抱山宇・守墨庵など多くの俳号を持っていた。山童の孤柳園という号も師匠の名前から柳の一字をとって付けた可能性もある。

岩波書店から刊行された『国書総目録』の著者別索引によれば、孤柳園・山童という名前の著者はいないので、俳諧を生業として生活していたとは考えられない。また、春秋庵二世を嗣いだ常世田長翠のように諸国を放浪して各地の門人を訪ね歩いて、添削をしながら生活費を無心していた業俳と呼ばれた俳人でもなかったようである。地元である竹本村に居を構え、いつもは酒屋の主人としての商売に精を出し

て、折を見て叔父の山蛭と一緒に旅をするという、典型的な在の俳人の生活が垣間見えてくる。他人が編集した句集には時々名前が見られるので、投句をしたり、依頼を受けて作句することはあっても、句集の編者として、書肆との折衝などを自分で積極的に行うなどの主体性は無かったのかもしれない。叔父の山蛭が天明四年（一七八四）十一月七日に亡くなった時にも追善句集「追善枝の霜」を編集したのは、南栄舎燕山であり、山童ではなかった。

二 鏡裏坊野松について

山童の妹の「りつ」が久保田村の新井家五代目の当主である久太夫義忠（始め、佐久間柳居の門下であったが、後に東武獅子門白山派に移籍した俳人で、市桃と号し、交時庵という庵号を持っていた）の許に嫁に行き、正徳三年に生まれたのが六代目当主の八郎右衛門興勝である。興勝は、父の市桃や義父になる山童と同じく佐久間柳居の門下の俳人であり、翅紅という俳号を持っていた。翅紅は、山童の嫡女であった「てう」を嫁に迎えたので、新井家は保積家から二代にわたって娘をもらったことになる。興勝のもとに嫁に来た「てう」は、元文三年（一七三八）に長男を産んでいる。この子が、新井家七代目の当主の宇左衛門堯知で、後に東武獅子門白山派の代表的俳人としても有名になる鏡裏坊野松である。新井家は、代々久保田村の名主を勤めていた家柄であったために、野松も長男だったこともあり、俳句は生業ではなくあくまでも余技であった。父親の翅紅は守墨庵柳居の門人で

あったが、野松も始めから玄武坊に師事したわけではなかったようである。野松が地域の他の仲間とともに正式に東武獅子門に入門したのは宝暦六年のことであった。宝暦元年に神谷玄武坊が白山下に居所を定めてから六年後のことであるが、野松がこの間俳句作りから遠ざかっていたわけではなく、この時期は父や山蛭・山童と同様に柳居の門弟として行動していたものと思われる。ただし、翅紅は、代官菅沼氏に従って肥前長崎で勤務に就いていたが、帰国して早々の宝暦五年（一七五五）七月十四日に四十二才で亡くなってしまふ。重しが取れたように、父親の死をきっかけにして、野松は句作に没頭し始めるようになる。ただし、句集を編纂して刊行した形跡は認められずに、「月並草稿」という形で、読みためた句を記録している。「月並草稿」は三ヶ月ぐらいの期間に作ったものを日記も兼ねてまとめている。野松にとって父方の祖母であるりつは享保十五年六月二十四日に三十三才で、母親であるてうは宝暦十三年二月一日に四十五才という比較的若年で亡くなっている。ただ、「月並草稿」には、寛政九年六月十九日に、野松の母が没し、妙照法尼という」と書かれた記事があるが、新井家の菩提寺である無量寺にある墓石からはこの日に亡くなったことが証明できる人は存在しないので、不思議な謎である。翅紅が再婚したとかその種の話は新井家には伝わっていないので、たまたま一行の記事ではあるものの、自分の母親の死亡時期を間違える筈はないと思われる。が、墓に刻されている法名とも全く異なるので、調査の必要性はあるものの、現時点での手がかりは全く無く、雲をつかむ状況である。

明和七年に玄武坊から獅子門の法脈を伝えられ、東武獅子門における野松の地位が不動のものになっていった。寛政十年正月十九日に師であった玄武坊が八十七才で亡くなるが、野松は前年あたりから師の教えを書き留めた草稿に「在這裏許」と名付け、独特の筆遣いで残し始めた。少なくとも書かれた時期が異なる三種類のものが作られたことが明らかである。玄武坊の死後は仲間割れを起こした白山派の結束を保とうと努力するが、空しい結果に終わり、晩年は句作からも離れてしまったようで、俳諧の方は息子の桃宜や孫の松者に任せてしまったように見える。

文化十一年十一月十九日に、七十七才で亡くなり「広野院法輪松樹居士」という戒名が刻された墓が無量寺にある。

三 「孤柳園追悼」について

『孤柳園追悼』は、草稿として残る写本で、筆写年代は明記されていない。しかし、刊記に相当する位置に記載が無く、確定はできないものの、寛政七年十二月に孤柳園山童がこの世を去っているため、追悼集としての性格上、その時期より筆写年代がさかのぼることはありえない。また、書写人の名前も書かれていないが、独特の筆遣いから考えると、新井家七代目の当主である宇左衛門堯知と断定できる。後述するように、八人の追悼文並びに句が収められているが、里谷まで一気に書き上げたと思われるが、虎冽以下は誤字を頻繁に訂正したり、表現を削除したりなど、前半部と後半部とでは対照的な印象を与

えている。堯知は文化十一年十一月十九日に七十七才でこの世を去っているため、書写されたのは当然それ以前ということになる。筆勢から考えると、行の乱れが認められないので、山童が死亡した直後から三回忌を迎えるまでの野松五十八歳から六十歳にかけての時期に書かれたものと推定される。

書誌学的な解説を加えるならば、当該資料は表紙を含めて十四枚の和紙が綴じられており、毎半葉がたて十九、九センチ、よこ二十一、八センチ、右側二箇所をそれぞれ本紙と同じ紙のこよりで綴じられている。表紙は、写真を見れば分かるが、中央に「孤柳園追悼」右側に「寛政七乙卯年十二月」左側に「富峯館蔵」と書かれている。序の類はなく、本文に入ると、毎半葉五〜七行、各行十〜二十字になっており、山童の息子である山雪が前書きに相当する部分を書いており、追悼される山童の詞書きと句をはさんで、山雪、野松、桃宜、里谷、虎冽、太茂、□□、風竹ら八人による詞書きと追悼の句が収められている。

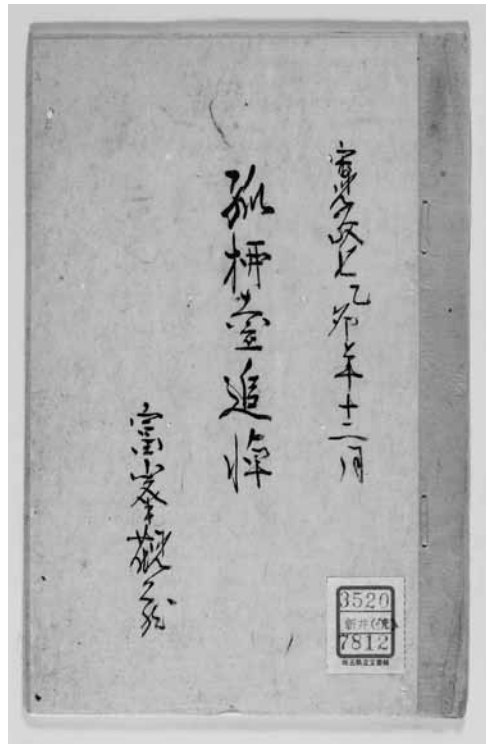
山雪の文は「孤柳園のあるしハ予か父にして壮年の／むかしより守墨庵の門に遊ひて風雅の／道もくからすまして筆道ハ三井先生を／師として生涯是を榮しめるより彼の／御弟子も餘多ある中にも心を得しもの／稀也とて師も深く愛し給ひ手つから／得意の二字を篆刻せし（後略）」というかたちで始まっている。

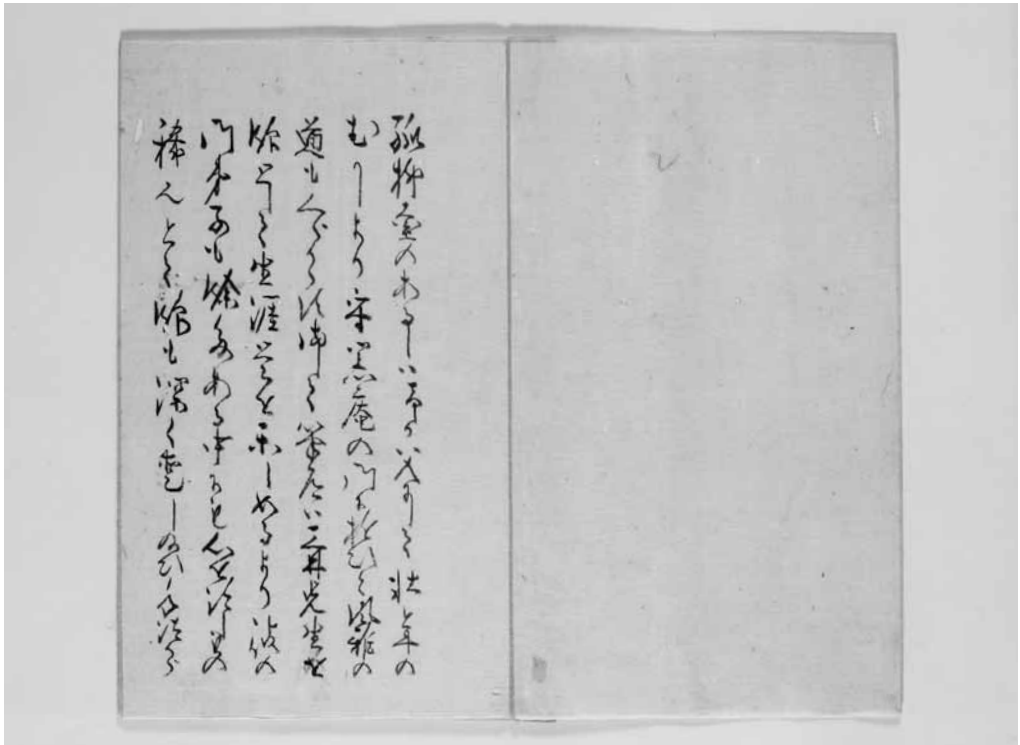
山童には、娘がいるだけで息子はいないと考えられてきたが、「孤柳園追悼」の存在により、山雪という息子がいることと山童が言われているような鳥酔の門人ではなく守墨庵佐久間柳居の直接の門下だった

ことが確認出来た。

山雪の文の後に、山童の詞書きと辞世の句がある。「源頼政卿宇治の戦ひに／敗せし時忠臣有之敵徒を／防て取こゝろ静に本懐を／遂られたり野夫は持病／再発の刻是を忍ふに勇／気なく多年の覚悟一時に／破れ空しく土を嚙て死るに／似たり／ひとり行く旅の／あらしは実に寒し／孤柳園山童」

「孤柳園追悼」に書かれている、山童のこの句が保積家墓地にある墓石に刻されているので、この本のある程度の信頼性が確保されている証明にもなっている。しかし、新井家所蔵の野松自筆になる「孤柳園追悼」が世に知られるよりもはるか前に墓石が建てられているので、保積家にも山童の辞世の句を記した書き物が有ったはずと思われるが、探す手立ては失われているので、不明なままである。





孤舟をいあやういすかみりて壯年の
 むしとらう字に庵の門を推して以の
 道もくくくいゆて茶をたてて其光生を
 除くも生に涯をそとぬしやうりつばに
 門をありて煉くあわすすもとんを許すの
 稀んとくも始も深く電一のくくははる



浮喜の二心をもか別せしるまど道る
 以のひきとされと之の中の上を操は其に
 休也ぬとのもともまらばいと之が中其
 喜慶を離れくも二心平すりて其
 物さ小月への徳を愛と志つて人世界を
 さうりい仙傳に有る月夜に於て
 すくくの法書を以てのちむくも料に

其の相を法の一明の教を余ひるも
 ことあるも一は法文の上を筆とてさうい
 ちるもそのくくくの日も散らるるもその
 本も神も之孫合も之忘るすれへもまを
 ち心本ありて一法と其教三以の物や
 其もも叶はすれはる、仙傳と休庵の
 心機をたええよりけりもつとわら

一と結ゆゑ、祥始は福、一後母の泣き
も沈みぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
末の泣きぬ。初之泣きぬ。中々泣きぬ。一と泣きぬ。
親族、きねも泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。

一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。

本おれ、一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。

山一

源秋、一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。
一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。一と泣きぬ。

今更に去年の冬候一時
 破れとて一と書と書と
 似たり
 今更に去年の冬候一時
 破れとて一と書と書と
 似たり
 今更に去年の冬候一時
 破れとて一と書と書と
 似たり

今更に去年の冬候一時
 破れとて一と書と書と
 似たり
 今更に去年の冬候一時
 破れとて一と書と書と
 似たり
 今更に去年の冬候一時
 破れとて一と書と書と
 似たり



の二通りぢい又体の石
く〜く〜に寄つて〜池田の
本を終つて〜終つて〜
〜〜〜

入除の〜と〜や〜
〜
〜

寛政と賑ハの夕三ツゆ
〜の終つて〜や〜
終つて〜の〜
〜の〜と〜

〜の〜と〜

久保田村新井家に縁のある俳人たち―その一―(針谷)



孤舟室山喜安は年あり
和漢の書籍も目とさ〜
終つて〜の〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜

〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜
〜の〜と〜

兼一ゆきやのしほえき
 の水も結くしほえき
 けりゆく雲の水龍れい
 ささゆいひくしほえき
 首ささくしほえき
 水ささくしほえき

糸洞山人の詩集の巻の
 二巻の
 死如の山ささくしほえき
 ささゆいひくしほえき
 糸洞山人の詩集の巻の
 二巻の

糸洞山人の詩集の巻の
 二巻の
 糸洞山人の詩集の巻の
 二巻の